

# FORUM REVIEW AF087

テーマ これからの激甚リスク共存社会へ備える  
～自然災害に対する保険業界の取組み

講 師 稲村 友彦 氏 SOMPOリスクマネジメント株式会社  
アナリティクス第1部 上席研究員

日 時 2020年10月20日

この数年、非常に大きな風水災の自然災害が起こっている。2018年度の風水災による保険金支払額は過去最大であり、その年の台風21号の保険金支払額は東日本大震災時に匹敵する。こうした状況下にあって保険を安定して提供するためにも、リスクを正確に把握して、支払い能力を確保しておくために「自然災害リスク評価モデル」が必要であり、「気候変動リスク評価」の視点が重要である。

自然災害リスク評価モデルについて、大学・研究機関との共同研究体制もどりながら、地震・風水災リスクを評価するモデルを自社開発。損害保険業務やコンサルティング業務に用いて、損害額の年超過確率カーブ等を作成するなどのモデル運用を行っている（図1）。

最近の台風の経験から見えてきた課題としては、建物特性による被害の違い、大都市域特有の被害傾向、気候変動の影響などがあげられる。そういう点で気候変動リスク評価について、特に近未来（10~20年後）の気候変動影響についてリスク・機会を適切に評価して役立てることが重要となる。気候変動は中長期にわたる課題であり、気候変動の影響予測には不確実性が伴うため、様々な状況下におけるケースを考慮するためにも、適切な気候変動シナリオの検討・分析が求められる（図2）。



1985年千葉県生まれ。東京都立大学理学部地理学科卒業。首都大学東京大学院地理環境科学専攻博士後期課程修了。2013年NKSJリスクマネジメント株式会社（現SOMPOリスクマネジメント株式会社）入社。専門は地理・気候学。風水災リスクに関連した保険商品開発や保険業務サポートを幅広く担当。博士（理学）

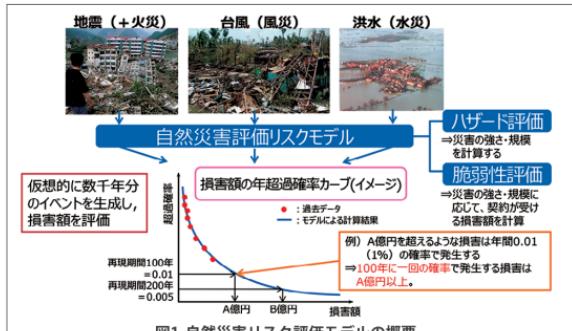


図1 自然災害リスク評価モデルの概要

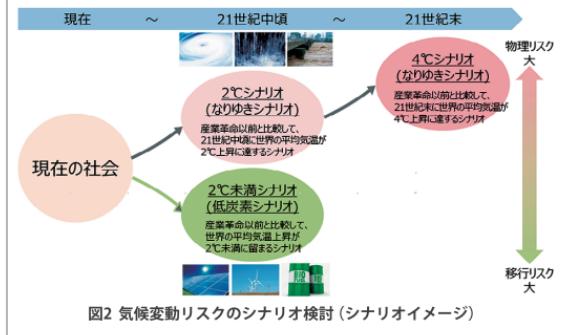


図2 気候変動リスクのシナリオ検討（シナリオイメージ）